

熟慮断行の大政治家

松 本 正 雄

大平総理が衆議院議員に初当選せられたのは昭和二十七年だから、その前の年、昭和二十六年に大平会が結成された。いまはないが築地の栄家という旅館で発足した。メンバーは私と一橋の同級生が主で約十名、清廉な実業家の集まりであった。大平総理が逝去せられる前の月まで、必ず毎月八日に、時には臨時に開かれた。私はその大平会のお世話役をしていた関係から、大平総理とは二十九年の長きにわたって、特に親しくお付き合いをしていた。

その長い年月の間にはいろいろな出来事があり、大平総理の想い出は尽きるものではない。しかし、そのうちで私が特に印象に深いのは、田中内閣当時、外務大臣として日中国交正常化に全力をあげられ、遂に日中航空協定締結を実現せられた不滅の功績のことである。

あときは自民党が二分せられた状況で、いわゆるタカ派の議員はこそって反対し、総務会においても反対論が強く、連日激論がたたかわされ、椅子も吹っ飛ばぐらいの騒ぎであつたらしいが、熟慮のうえ一度決意された大平外相（当時）はテコでも動かぬ姿勢で頑固であつた。総務会の席上で、「たとえ、この身は八つ裂きにされようと、私の信念は変わらない」（大平外相本人の言葉）と啖呵をきつた。

また右翼団体も猛然と反対して、東京都内の電柱その他には「大平外相に死んでもらおう」との貼紙が氾濫していた。これを憂えて私は大平外相にその話をしたところ、大平氏は「死んでもらうなんて余計なお節介だ。死

ぬときは自分でチャンと死にますよ」と一笑に付されたが、そのとき、私は大平さんの顔に不返転の凜然たるものをみた。いつもの、にこやかな笑みはなかった。

ところが、中国へ出発間際になって、大平外相は運悪く病気になる、出発が危ぶまれたが、本人は「国際的な約束だから、たとえ死んでも行く」といつて予定通り北京へ向かわれた。大平氏歿後、志げ子未亡人の語るところによれば「あの時は遺言を書いて行きました」とのことである。北京での交渉は難航を極めたらしい。

その内容については、私どもとしては知る由もないが、「粘りに粘って努力したが妥結せず、いよいよ、あきらめて帰国しようとした寸前になって、中国の首相からOKの回答があり、ホッとした」と帰国後本人が述懐しておられた。至誠天に通じたのであろう。この間の事情は同行の田中角栄元首相のみが最もよく知っておられるはずである。

右のような経緯から私は「この人こそ、ほんものの政治家である。大平氏本然の姿であり、立派なものだ」と、その当時しみじみ敬服し感心したものである。まことに熟慮断行の一大政治家であった。

大平総理急逝の翌日の日本経済新聞に田中六助前官房長官（現通産大臣）が書かれた「ベネチアに行くよ！幻に終った大平声明」なる一文を読んで私は涙が出た。前記の北京行きの大平氏の心境をよく知っていた私としては、「戸板に乗ってでも」ベネチアに行かれることと思っていたからである。

私どもは、安定政権下において、もうしばらく大平総理にその抱負の一端でも実現してほしかった。それがどれだけ日本のため世界人類のためにプラスになったか計り知れないものがあると思うが、あの謙虚で権力の座に全く執着心なかった大平総理は、天国で「日本人の叡智は国を誤らせるようなことはありませんよ、私がいなくても大丈夫です」と、にこやかに話しておられるような気がする。

（国家公安委員・元最高裁判所判事）